

制約

2020. 12. 8

私たちは、「制約」というものをよくないものと考えがちである。しばしば、それを避けようとしてしまう。制約があるからこそ得られる大切なものがあることには、なかなか気がつかない。「『制約』という逆説」という文章がある。

ラジオで初めて番組を持ったときのことです。

当時のテレビ全盛の時代において、ラジオとは、語り手にとって「不自由なメディア」であると考えていました。音声と映像を駆使し、語り手の声だけでなく、表情や眼差し、身振り、手振り、さらには、姿勢や服装まで使って自由にメッセージを伝えることのできる「テレビ」というメディア。

それに比べて、「ラジオ」というメディアは、語り手にとって、音声だけしか伝えることのできない「制約されたメディア」であると思っていました。しかし、番組を始めて不思議なことに気がつきました。ラジオというメディアは、どこまでも深く、メッセージを語ることのできるメディアだったのです。そして、心に抱いている思いが、そのまま聴き手に伝わっていくメディアだったのです。

あたかも光の無い暗闇において、音を聞きわける力が研ぎ澄まされるように、ラジオという「制約されたメディア」は、その「制約」が、我々の語る力、そして、聴く力を高めてくれる。その不思議な逆説に気がついたのです。そして、その逆説は、さらに深い真実を教えてくれていることに気がついたのです。

我々の人生における「制約」もまた、我々の人間としての「力」を高めてくれます。

私たちは、制約に対して文句を言っていることがある。文句からは、創意工夫は生まれない。限られた条件の中で、与えられた条件のもとでどうすればいいかを考える。そこから創意工夫が生まれる。

時間的な制約、予算的な制約、空間的な制約、人的な制約、まわりを見渡せば制約だらけである。仮に、すべての制約を取り払って自由に考えていいとなったらどうであろうか。創意も工夫も必要ない。返って考えが浮かばないかもしれない。

私たちは、制約の中で生きている。制約のもとで成長させてもらっている。制約があるからこそ力をつけることができる。ここ数ヶ月間は、従来の制約の上に、さらなる大きな制約が積み重なってきた。

まもなく1年になろうとしている。私たちは、創意工夫を重ね、かなりの「力」をつけてきたはずである。その力が本物かどうかは、後の歴史が証明してくれると思う。